

2023年 3月10日 会報144号	<h1>かわち野に吹く風</h1>	東大阪文化財を学ぶ会 会長 南 光弘
-----------------------	-------------------	-----------------------

歴史探訪 継体天皇を探る湖北バスの旅  
 実施日 3月 29日(水) 雨天決行

1. 集合時間・バス出発 午前7時50分※遅れないようにお願いします。
2. 集合場所 東大阪商工会議所前(河内永和駅すぐ、旧東大阪市立市民会館前)
3. 費用 6000円(昼食代2200円、バス、高速道路通行料、保険料等)ワクチン接種証明書のコピーをご持参ください。クーポンが付きます。参加費が余った時はツアー終了後に精算します。
4. 昼食 サンプリッジホテルで会食。  
揚げたて天ぷら、一人鍋、鯖寿司など。天ぷらとサラダは食べ放題。ドリンクバー無料
5. 申し込み 大型バス(定員)を予定しています。是非、同封のハガキにてお申し込みください。  
定員オーバーの際は申込葉書、E-mail、LINE、ショートメールなどでの受付、先着順とします。  
E-mail minamifx56a1212@dune.ocn.ne.jp ショート mail 090-8375-9655  
何れも、複数申込でも結構です。E-mail、LINE、ショートメールで申し込まれても葉書は投函しておいて下さい。誘い合って参加下さい。
6. 行程  
東大阪商工会議所前→鉛鍛比古(えれひこ)神社(長浜市)→海津大崎の桜並木→昼食・サンプリッジホテル→彦主人王御陵(高島)→胞衣(えな)塚→鴨稻荷山古墳→高島歴史民俗資料館→水尾(みお)神社→大溝城跡→白鬚神社→近江神宮→兎の三尾神社→(三井寺)→帰着 6時30分過ぎ

### ≪ 解題1 ≫ 継体天皇の9つ謎

『日本書紀』によると、子どものいない25代武烈天皇が死ぬと、皇位継承者が絶えそうになった。そこで大連の大伴金村らが候補者を捜し、白羽の矢を立てたのが、越前三国にいた男大迹(おほと)王。

王は応神天皇の5世孫で、父は彦主人王、母は垂仁天皇の7世孫振媛。振媛は三国の坂中井から、彦主人王により近江の三尾の別業(なりどころ)に迎えられ、王を生んだが、夫の死後、子を連れて高向に戻っていた。振媛の母の出身地は越前三国高向といわれている。

507年、男大迹王が57才の時、金村らが迎えに来た。王は河内樟葉宮に至り即位し、前代以来の大連大伴金村・物部鹿鹿火、大臣許勢男人を再任し、仁賢天皇の娘手白香皇女を皇后とした。5年後に山背国筒城宮、現京田辺付近。そして、518年弟国宮、現長岡京市付近に移っており、ヤマトに入ったのは樟葉宮での即位20年後の526年のこととされる。その5年後、82歳で亡くなる間に安閑天皇が即位(534年)する。

一方『古事記』には『武烈天皇』が亡くなった記述の後に『皇位を継ぐ王がいなかったため、応神天皇の5世の孫、袁本杼命(をほどのみこと)を近江国から呼び迎えて、手白髪命(たしらかのみこと)と見合わせて即位した』と即位について簡単にしか書かれていない。

しかし、ヤマト入りを果たすまで『紀』の或本の記述では7年とし崩年を82才としているが、『記』では、43才としている。これは神武天皇から推古天皇までが綴られている『記』の中で、終盤の比較的新しい「仁賢天皇」以降は天皇に関する最小限の記述しか書かなかったからだと言われている。

(1) なぜ、『古事記』『日本書紀』が継体天皇のみ「5世の孫」としたのか。

- ・男大迹王(おおどのおう)(継体) 応神の五世孫。彦主人(ひこうし)王の子。母は振媛、垂仁より7世の孫
- ・『継嗣令』(養老令)によると、天皇の兄弟、皇子は「親王」他は、諸王と規定。親王から5世は、王の名前は許されても「皇親」ではなかった。文武天皇の慶雲2年に「皇親」の範囲を5世とした。

(2) 継体天皇の生まれを『古事記』は近江とし、『日本書紀』が越としたのか。

- ・継体は57才まで九頭竜川下流の坂井町付近に住んでいた。この地は宗我彦太忍信(ひこふつおしのまこと

のみこと)の4世孫若長足尼(わかながのすくね・蘇我氏の一族)が三国国造。(『国造本紀』)振姫が夫の死後隠棲した地、坂井郡の丸岡町、現在は坂井市。

(3) 先帝の武烈天皇の暴虐淫乱記事はなぜ書かれたか。

(4) 継体天皇が河内馬飼首荒籠の説得で動いたのはなぜか。

・一説では、河内馬飼首荒籠ら百濟勢力が継体擁立の主になっていた。

(5) 継体天皇の漢風諡号『継体』とは何を意味するのか。

・継=つなぐ 軀=体制

(6) 継体が武烈死後、ヤマトにダイレクトに行かず淀川流域周辺に20年(『日本書紀』)も徘徊した理由は、

・樟葉宮(5年)→筒城宮(6年)→弟国宮(9年)→磐余・玉穗宮

交野に「森遺跡」鍛冶工房(肩野物部)戦略物資を支配。淀川・大和川水系、水運・交易の拠点。

木津川・宇治川・桂川が合流する地点 百濟→越、近江→琵琶湖→淀川→河内、ヤマトへ

・この樟葉宮以降の都の移転は『紀』の記載。『記』には記載されていないことから、樟葉宮から山城を経由せず、直接ヤマトに入ったのではないかとする説もある。

(7) 継体天皇の即位の時、“三種の神器”が二種『鏡』と『劍』なのか。

(8) 皇統でもある継体天皇が仁賢天皇の御子、手白香皇女(『紀』)を娶るがなぜ「入婿的」なのか。

・目子媛(尾張連草香娘)は即位前に娶っていた。勾大兄(まがりのおおえ)＝安閑。檜前高田皇子＝宣化を生む。

・また、継体天皇の妃については、①三尾氏らの祖出身の若比売(わかひめ)②尾張連草香の娘、目子媛(めのこひめ)③仁賢天皇の娘、手白髪命(てしらかのみこと(『記』))④息長真手王の娘、麻積郎女(あみのいらつめ)⑤坂田大俣王の娘、黒比売(くろひめ)⑥三尾君の娘、倭比売(やまとひめ)⑦和珥臣河内の娘、美媛(はえひめ)以上の7名の妃。『日本書紀』には8名の妃の名前が書かれている。

三尾氏、三尾君は同じ。高島に勢力を持っていた豪族。

(9) 継体天皇陵(今城塚古墳)がヤマトや河内になく、摂津「三嶋の藍」にあるのはなぜか。内倉武久氏は、筑紫にも「三島の藍」がある。という。

## < 解題 2 > 湖北、湖西の渡来人集団

天日槍(あめのひぼこ)神の渡来伝承は、「古事記」「日本書紀」「播磨風土記」などにかなり詳しく記されている。まず、「日本書紀」の記事を要約すると「天日槍は、船に乗って播磨国に渡来した。長尾市(ながをち)らを遣わして天日槍に「お前は誰か」と尋ねた。天日槍は、「私は新羅の王子である。」と云った。持参してきた宝は、珠が三個、出石の刀子(かたな)、出石の槍(ほこ)、日の鏡、熊のひもろぎ、胆狭浅(いざさ)の太刀の八種である。天皇は、「播磨国と淡路島に自由に住んでよい」と云った。天日槍は、「自ら諸国を巡り歩いて、気に入った所を選びたい。」と云った。そして、許された。天日槍は、宇治川を遡って、近江国の吾名邑(あなむら)に住んだ。

近江国からまた若狭国を経て但馬国に至り居處を定めた。近江国の鏡村の陶(すえ)人は、天日槍に従ってきたものである。天日槍は但馬国の出石の娘と結婚した。持ってきた神宝は、出石神社の神宝とした。天日槍が渡来してきた理由、人名、地名など詳細に述べられている。

『日本書紀』の記事に従って天日槍の足跡を簡単にたどると、まず宇治に入るには、大阪の淀川を遡らなければ入れない。淀川の河口の西淀川区姫島には、式内社姫島神社が鎮座し、祭神は天日槍の妻、赤留姫である。その他に比売許曾神社2社、赤留比売神社がある。神社の分布はそれを祭祀した集団の存在を示す。

宇治川を遡ると近江国の琵琶湖の南、現草津市に着く。琵琶湖の東岸、草津市穴(吾名)村に安羅神社が鎮座し、祭神は天日槍命である。毎年、日槍祭りも行われている。近くには、三宅の地名があり、三宅氏族は、天日槍命の子孫である。安羅神社の北東約14kmの竜王町鏡村に、古いて赤い巨木の鳥居の鏡神社が鎮座し、祭神は由緒書に天日槍命とあり、1200年以上の歴史のある式内の古社である。神社の南に神体山の鏡山(385m)がそびえ立ち、麓には鏡山窯跡群が分布し、須恵の地名も残っている。苗村(吾名村)神社が鎮座し、祭神は、天日槍である。「日本書紀」の記事は史実を示している。鏡神社の北西約7kmの中主町は、式内大社の兵主(ひょうず)神社が鎮座する。

琵琶湖の最北端の余呉町には、天日槍命を祭神とする新羅神社と鉛練比古（えれひこ）神社が鎮座する。近くには、天日槍の古墳といわれる「日槍塚」もあり、村人に守られている。

新羅神社の南東約 24 kmの近江町能登瀬に式内社の山津照神社が鎮座する。祭神は、息長宿禰王である。「古事記」の天日槍の記事によると、天日槍の6世孫娘の葛城の高額（たかぬか）比売命と息長宿禰王が結婚して応神天皇の母、息長帯比売を産む。つまり応神天皇は、天日槍の8世の孫になる。

この神社境内の山津照神社古墳は、全長 63mの前方後円墳で金銅製装身具、馬具、鉄刀、各種の須恵器など多数出土し、5世紀後半の築造と推定される。息長（いきなが）は、製鉄のフイゴを意味し、この面でも息長氏、天日槍族と近いことを示している。

高島町鴨に、稲荷山古墳がある。全長 46mの前方後円墳で、6世紀前半の築造の横穴式石室の中の豪華な家型石棺（二上山の凝灰岩）から「金銅製冠・沓・金製垂飾付耳飾、双龍環頭太刀、馬具、鹿角製刀装具、須恵器など多数出土している。なお、鹿角製刀装具と同じものが山津照神社古墳からも出土している。この古墳は、継体天皇の有力プレーン（三尾氏）の墓といわれている。

この古墳の北約 28 kmの若狭国三方に、天日槍命を祭神とする式内社御方（みかた）神社が鎮座する。この神社の南約 12 kmの福井県上中町天徳寺に、十善ノ森古墳がある。全長 60mの前方後円墳で、5世紀後半（450年頃）の築造の横穴式石室から、金銅製冠・金銅製馬具・帯金具などが出土している。北陸地方では、最古の横穴式石室である。三宅の地名もある。

敦賀市角鹿町に越前国一の宮「氣比神社」が鎮座する。祭神は、氣比大神（天日槍命）イササ別（わけ）命（天日槍が持参した胆狭浅（いざさ）の太刀）、神功皇后、応神天皇その他である。ちなみに応神天皇は皇太子の時に、イササ別神と名前を交換して「誉田別（ほむたわけ）命」と名付けという。（『日本書紀』）

氣比神社境内には、大加羅の王子、都怒我阿羅斯等を祭神とする。角鹿（つぬが）神社も鎮座する。その他に、常宮神社（国宝の新羅鐘秘蔵する）、信露貴（しろき）神社、白城（しらぎ）神社などがある。氣比神社の北約 17kmの今庄町に新羅神社が二社鎮座し、さらに北西約 25kmの織田町には、天日槍を祭神とする式内社剣神社が鎮座し、北西約 27kmの坂井郡丸岡町に、継体天皇の母、振媛（ふるひめ）命を祭神とする式内社高向（たかむこ）神社が鎮座する。この神社の南東5kmの松岡町に、二本松山古墳がある。全長 80mの円墳で、舟形石棺から金銅製冠が2個出土し、韓国池山洞古墳群出土品と類似している。この他に須可麻神（美浜町）静志神社（大飯町）などがある。

なお、百済国滅亡（660年）「白村江の戦い」（663年）後、百済王家官人の多くが湖東、近江国・近江八幡、東近江辺りに亡命し居住している。

#### ① 式内社、鉛練比古（えれひこ）神社

鉛練比古神社の祭神は、天日槍命と大山咋神（おおやまくいのおおかみ・秦氏の松尾大社と同神）。創建年代は不詳、「山王大社比叡大明神」と称したという。江戸時代には「山王社」「江連社」と言われた。

明治3年に伊香郡の式内社鉛練比古神社に比定された。日吉大社からの勧請は後世の事で、「日槍（ひぼこ）屋敷」なる小字名や古墳で「日槍塚」と呼ばれるものがあり、当初は天日槍命を祀る神社であった。

余呉町には、同じく天日槍命を祭神とする新羅神社が鎮座している。

「近江伊香郡誌」によれば天日槍は中郷に留まり、坂口郷の山を切り、余呉湖の水を排して面積を 1/4 に縮めて田畑を広げたと伝わる。

社地の裏山には「鉛練古墳」があり、古墳祭祀が起源だとも考えられている。

#### ② 彦主人王御陵（安曇陵墓参考地）

説明板には、「当初は帆立貝式古墳で、周辺にある高塚四基の陪塚と共に宮内庁の所管となっている。

「王塚」又は「ウシ塚」と呼ばれ、地元では応神天皇の皇玄孫彦主人王（ひこうしきみ）の墳墓と伝承されている。伝承では彦主人王は近江国、北越5力国を刺史（しし）として治めていた。越前国坂中井の里より妃（きさき）として迎えられた振媛は垂仁天皇の子孫にあたり、この山崎の地で三つ子を産んだ。三王子の弟君彦太王は、後に26代継体天皇となった。彦主人王は王子が5才の時亡くなったので、この地に葬られたと伝えられている。

当古墳は大小 40 数基の塚が散在する王塚田中古墳群の最大のものといわれている。」

#### 《胞衣（えな）塚》

継体天皇は高島の地に誕生され、母・振姫がお産のあと天皇の「へその緒」を埋めたのが、この胞衣塚だと伝えられている。胞衣（えな）とは胎盤のこと。

この塚は、直径約 11.5m、高さ約 2.5mの円墳で、6 世紀の築造と推定されている。

### ③ 鴨稻荷山古墳

継体天皇の父、彦主人王（ひこうしおう）は三尾の別業（なりどころ）にいた時に越前から妃を迎えている。そして生まれたのがヲホド王（諱）、後の継体天皇。（『紀』では男大迹王、『記』では袁本杼命と記される）

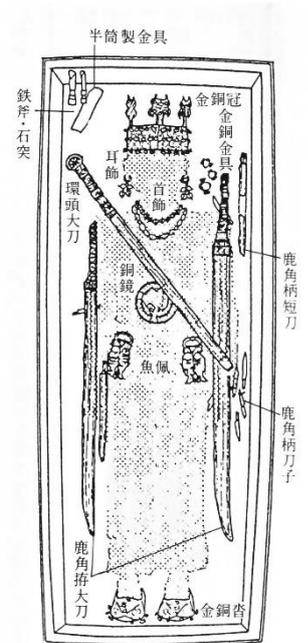
継体天皇には正式の皇后「手白香皇女」の他に 7 名～8 名の后妃がいたという。近江の息長・坂田氏、尾張氏や中央豪族の和邇（ワニ）氏からも入内しているが、三尾氏からは 2 人も入内しており影響力の高さが際立っている。この三尾氏の首長の墓と思われる鴨稻荷山古墳（6 世紀前半に築造）は墳丘長約 50m の前方後円墳であったと推測されている。

古墳自体は、現在そのほとんどを消失しているが、長さ 9m・幅 1.8m・高さ 1.8m の石室から二上山の凝灰岩製の家形石棺が出土している（大正 12 年発見）。

石棺からは、金銅製冠や飾りのついた沓（くつ）、金製の耳飾など大王クラスの副葬品をはじめ、魚佩（ぎよはい）、鏡、玉類（水晶製切子玉 28 個、琥珀製なつめ玉 12 個など）、捩じり環頭大刀、鹿装大刀・鹿角製柄頭付鉄太刀 2 口、鹿角製柄鉄刀子などの刀子 8 口、三葉文楕円形杏葉、鉄斧などが検出されている。

これらのうち、広帯二山式冠・捩じり環頭大刀・三葉文楕円形杏葉の 3 品は当時の王権特有の威信財であり、この 3 品セットで出土しているのは鴨稻荷山古墳と物集女車塚古墳（もずめくるまつか、京都府向日市、45m 程の前方後円墳、二上山の家形石棺）のみであり、鴨稻荷山古墳の被葬者と物集女車塚古墳の被葬者は、継体天皇の「弟国宮」があったことから、継体擁立勢力と何らかの関係があったと考えられる。

家形石棺は、屋根部分の 4 つの突起に縄を括り付け、突起部分を下にした状態で、二上山から古大和川、淀川を船で遡り運ばれたと推定されている。



### ④ 高島歴史民俗資料館

館内に、「金銅製冠」と「飾り付き金銅製沓」金メッキで輝く冠と沓（くつ）。亀甲文様が覆う表面には無数の針金が突き出し、その先端には楕円形や魚形をした銅の薄片「歩揺（ほよう）」、絹糸でできた縦（ふさ）飾り「菊綴（きくとじ）」や、ガラス小玉が飾られている。

展示の冠（左写真）は“広帯二山式冠”と呼ばれている。九州の江田船山古墳、奈良の藤ノ木古墳からもこのタイプの冠が出土しているが、出土分布の中心はここ琵琶湖から淀川流域と考えられている。



また、「捩じり環頭太刀」や「金製耳飾り」馬のお尻の上につける馬具「三葉文楕円形杏葉（さんようもんだえんけいぎょうよう）」などの大王クラスの副葬品も展示されている。

### ⑤ 式内社、水尾（みお）神社

天平神護元年（765）の創建と伝えられる式内社の古社。祭神は磐衝別命（いわつくわけのみこと）と比咩神（ひめがみ）。磐衝別命とは、第 11 代垂仁天皇の皇子で、『古事記』『日本書紀』では三尾君（三尾氏）・羽咋君（羽咋氏）の祖としている。比咩神とは、継体天皇の母の振媛を指す。

『先代旧事本紀』では、磐衝別命の児石城別王（いわきわけのみこ）を羽咋国造に、四世（よつぎ）の孫大兄彦君（おほえひこのきみ）加我国造に定め賜う、とある。

社域は広大であったようで、音羽の大炊神社は、炊殿跡。安曇川町の今宮神社、太田神社は御旅所の跡と伝えられ繁栄を物語っている。古来歌枕として有名な背後の三尾山には、拝戸古墳群があり、三尾君の祖の墳墓と伝えられる皇子塚がある。

#### ⑦ 大溝城跡

大溝城は、安土城を中心とした、琵琶湖を囲む織田政権 4 城ネットワークの一つ。

城主の織田信澄（のぶすみ）は明智光秀の娘婿で、大溝城の縄張（設計）は光秀によると伝わる。新莊城（現新旭町）にいた織田信澄が、安土・桃山時代に築城したもので、商家や寺院などを移して城下町を造った。

本丸の南東の乙女ヶ池は琵琶湖の内湖で、古地図によると、大溝城は城堀を内堀とし、乙女ヶ池を外堀とする水城であり、「鴻湖（こうこ）城」とも呼ばれた。江戸時代に分部光信が城主になると、この地を陣屋として 12 代光謙（みつりの）の明治維新までその支配が続いた。



#### ⑦ 白鬚神社（高島町） 潮面に立つ「鳥居」 近江の巖島” パワースポットとして有名に

創建は不詳だが、垂仁天皇の頃との伝承がある近江最古の神社。祭神は導き・道開きの神、猿田彦命。別社名が、白鬚明神・比良明神。

由緒書には、「延命長寿の神様。また、福德開運・縁結び・子授け・新生児の名授け・交通安全・船舶安全等人生の全ての道案内の神として広く信仰を集めている。」という。

湖面に立つ大鳥居は、広く琵琶湖周辺からの参拝の人々を迎えるため。両部式鳥居という。

社名の「白鬚」は、祭神の「猿田彦の白鬚」からという説がある。しかし、真実は、

新羅（しらぎ）の人々が参る神社⇒新（しら）→白（しら）鬚（が）⇒「猿田彦」とつなげた。

琵琶湖周辺には、新羅系の渡来人につらなる「新羅神社」が多い。

本殿は檜皮葺き入母屋造りで、豊臣秀吉の遺命を受けた豊臣秀頼の寄進を受けて慶長 8 年（1603）に建立されたもの。桃山時代特有の建築様式を今に残している。裏山には、古墳群があり、その一つの横穴式石室そのまま岩戸社として祀られている。近くには磐座がある。祭神の「猿田彦」につなげて近世になって祀られたものという。

湖中大鳥居は湖岸より 58m にあり、高さ湖面より約 10m、柱間約 8m。由緒書きには、「往古、神社前の湖中に鳥居があったという伝説や絵画があり、これを知った大阪道修町の薬問屋小西久兵衛氏が昭和 12 年に復興寄進されたもの。」（現在の鳥居は、昭和 56 年に琵琶湖総合開発の補償事業で再建されたもの）

#### ⑧ 近江神宮・大津京

近江神宮は第 38 代天智天皇を祀り近江大津宮跡に、昭和 15 年（1940 皇紀 2600）11 月 7 日の創建。

境内地は約 6 万坪（20 万㎡）。社殿は近江造りあるいは昭和造りと呼ばれ、山麓の斜面に本殿・内外拝殿を回廊が取り囲み、近代神社建築の代表的なものとして、国の登録文化財に登録されている。

朱色の楼門は見応えがあり、天智天皇の「漏刻」に因んで境内には多数の時計がある。また、天智天皇が詠んだ「秋の田のかりほの庵の苫（とま）をあらみ わが衣手は露にぬれつつ」という歌が百人一首の第一番として選出されており、その縁から近江神宮は「かるたの殿堂」と言われている。

#### 《大津京・宮》

天智 6 年（667）3 月、天皇は都を大和の飛鳥岡本宮から近江へ移し、天智・弘文 2 代の都となった。

遷都の理由としては人心の一新をはかる一方、白村江の敗戦による国防上から行われたといわれている。遷都して 4 年後、天智天皇が崩御し、続いて起こった「壬申の乱」によって大津京は僅 5 年で廃都となり、都は再び奈良・飛鳥（飛鳥浄御原宮）に還ってしまった。

大津市の北郊にあったといわれる大津宮跡は崇福寺跡説、南滋賀廃寺説、錦織地区説などがある。

万葉集ではこの都を「近江大津京」「大津宮」「近江宮」と呼び、「大津京」とは表現されていない。

楽浪（ささなみ）の、志賀の辛崎（からさき・唐崎）、幸（さき）くあれど、大宮人（おほみやひと）の、舟待ちかねつ 柿本朝臣人麻呂 巻一 三十（※「近江（おうみ）の荒れたる都を過ぐる時に詠った）

### ⑨ 三井寺

三井寺（正式名称：園城寺）とは、天台宗の総本山で、古くから日本四箇大寺の1つに数えられる由緒あるお寺。西国三十三所観音霊場の第14番札所である観音堂、近江八景「三井晩鐘」の鐘楼などに加え、多数の文化財も収蔵。さらに桜の名所としても知られている。

天智天皇・天武天皇・持統天皇の誕生の際に産湯をつかった霊泉があることから、「御井の寺」という意味で「三井寺」と言われている。現在もこの霊泉はポコポコと祠の中で湧き出ており、その音を聞くことができる。

徳川家康により甲賀の常楽寺より移築されて重要文化財となっている仁王門。そして、三井寺の総本堂、豊臣秀吉の正室北政所によって再建された国宝の金堂。金堂は、三井寺境内でもひととき大きく威容を誇っている。また、近江八景「三井晩鐘」で知られる大鐘は、宇治の平等院・高雄の神護寺と共に、日本三名鐘に数えられているという。三井寺には、国宝10件・重要文化財42件の国指定文化財があり、量だけでなく質の高さは全国でも屈指のもの。※ただし、見学受付時間が4時30分まで。《入山料550円》

### ⑩ 三尾神社

神紋がウサギの神社。室町時代、応永年間に足利将軍が現存の本社を再興し、慶長年間に豊臣秀吉が社殿の修理を加えさせたと伝わっている。園城寺（三井寺）から神仏分離令により現在に場所に移された。本殿は2014年に国の重要文化財に指定されている。

三尾神社の言い伝えでは、その昔、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）がこの地・長等山の地主神となったとき、伊弉諾尊は赤・白・黒の三つの腰帯をつけており、姿が三つの尾を引くのに似ていたので三尾明神と名付けられたという。その三つの腰帯それぞれが神様になり、その中の本神が、太古、卯の年、卯の月、卯の日、卯の刻（朝方）、卯の方（東）より出現されたため、昔からうさぎが神様のお使いとされ、三尾神社のご神紋も「真向きのうさぎ」となっている。

